

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4372400954		
法人名	社会福祉法人 熊本東翔会		
事業所名	グループホーム たいめい苑		
所在地	熊本県玉名市岱明町古閑388番地		
自己評価作成日	令和4年10月7日	評価結果市町村報告日	令和5年 1月 6日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

<p>・「認知機能へのアプローチ」に重点を置き、認知機能へ働きかけることで、残存機能を活用し、ADLの向上を目指し、質の高い生活の実現に努めている。・外部での研修も再開されているので、スキルアップの為に職員に研修の機会を増やしている。・他事業所と連携、情報を共有し、入居申し込みの方の待機期間が短くなるように努めている。・入居者おひとりおひとりをかけがえのない存在として、ホスピタリティ豊かなケアに努めている。・高齢者介護の三原則を尊重し、主体は入居者であることを常に考えて支援を行っている。</p>
--

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://search.kaigo-kouhyou-kumamoto.jp/kaigosip/Top.do
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	NPO法人 九州評価機構
所在地	熊本市中央区神水2丁目5番22号
訪問調査日	令和4年11月17日

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

<p>この数年のコロナ禍においてもできるだけ従来のケアを継続し、家族との関わり、地域との関わり、職員育成を続けて来られた様子が窺えました。家族の気軽な面会・来訪を受けることも難しかった中でもサービス担当者会議には家族に来て頂き、zoom等利用しキーパーソン以外の家族の参加も受け入れる等、新たな取組みにも発展し、お互い顔を見ることで質問し、理解するという以前にも増して充実した会議となった様子が聞かれました。入居者の日々の生活は、洗濯物の名前が薄れていると書いてくださったり、名前を刺繍してくださったり、また傍らでは見守る入居者の姿も見られるようです。「入居者ではなくサポーターとして」日常生活が送られており、「入居したから今までの関係・環境を絶つことなく」、できるだけ継続させたいとケアに臨む姿勢がありました。</p>
--

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)		1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)		1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	毎月、第1金曜日に部会議を開催。参加者全員でケア理念、ケア方針を唱和し、運営会議の申し送りや日々の実践、理念に基づき、日頃のケアの振り返りを行っている。	毎月のグループホーム部会議の開始時にケア理念・方針を唱和している。「その方の居場所作りのための役割作り」「残存機能へのアプローチ」を念頭にケアを実践している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	年に2回、地域の公役に参加している。また、「よりどころ」と称した民児員の方々と意見交換会を毎月、第2金曜日に実施している。	開設以来法人全体で地域との繋がりを大切にしていた運営を行っており、地域の清掃には職員も参加している。法人で開催する夏祭りは住民の方々の来訪もあり、地域に馴染んだ行事となっている。民生委員との意見交換会では地域の悩み事を共有する場ともなっている。	この数年コロナ禍でもあり、入居者と地域の方々との関わりの機会作りが難しい状況が聞かれました。以前のように入居者と地域の繋がりが感じることができるよう終息を願うばかりです。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	中止となっていた地域活動も少しずつ再開となり、実践で得た知識や支援の方法を地域に発信し、地域貢献に取り組んでいきたい。今年度は新しく職員がキャラバンメイト研修に参加する。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	奇数月に開催し、開催月に合わせた課題を報告している。コロナウイルスの感染状況を見ながら5月、7月は開催し、9月は書配布とした。参加者と意見交換、情報の共有を行い、サービス向上に努めている。	運営推進会議は行政や地域包括支援センター、入居者家族等の参加もある。コロナ禍であるが、感染レベルによりできるだけ対面での開催に努め、事業所の日頃の取組み状況を伝え意見交換の場を持つよう取組んだ。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議に玉名市役所から参加されており、自事業所の取り組み、実情の報告をしている。今年度は空床を利用したショートステイについて相談に出向き、サービス開始に繋がった。	市とは運営推進委員会や日頃の報告・連絡・相談にて協力関係の構築を行っている。今年度は空床時のショートステイ利用について市役所へ出向き話し合いを重ねた。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	グループホームからも抑制・拘束・虐待検討委員会に委員として参加している。また、部内勉強会でも職員が講師となり、身体拘束、禁止行為についての理解を深め、常に身体拘束に当たらないかを考えながらケアに取り組んでいる。	法人の抑制・拘束・虐待検討委員会の内容は参加した職員より全職員へフィードバックされ、言葉遣いや気付かないスピーチロック等、繰り返し注意しあう事を話している。虐待行為・虐待の芽チェックリスト、ネグレストサインチェックシートを用い問題解決の取組みも行っている。コロナ発生を想定し、職員都合になりがちなケアが虐待に繋がらないかも話し合った。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	抑制・拘束・虐待検討委員会に委員として参加し、虐待防止の意識を部内で共有し、日々のケアの振り返りを行っている。虐待に進展する恐れのある不適切行為についても意識が向くように努めている。		

グループホーム たいめい苑

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	4月の部内勉強会で権利擁護、成年後見制度について勉強会を実施している。全職員が権利擁護の制度について理解し、活用できるように自己研鑽に努めている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約はケアマネジャーが行っている。その際にご家族の要望、疑問や気になることなどをお尋ねし説明を行っている。ご家族の要望等は介護計画書に反映して実行している。改定等の場合は書面で説明し、同意書を交わしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	入居者には日頃の会話の中で要望や意見を聞いている。また、面会時、サービス担当者会議、運営推進会議でご家族の意見を伺う機会を設けており、そこでの意見をグループホームの運営に反映させている。玄関に意見箱も設置している。	コロナ感染レベルを都度検討しながら、受入れや方法・時間等工夫によりできるだけ面会を受け入れてきた。従来より家族とより良い関係を作るため、報告だけでなく面会を兼ねて事業所への来訪を歓迎している。コロナ禍ではあるが、地域に済むキーパーソンだけでなく、オンラインを利用した遠方の家族との面会も充実した。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	個別面談や部会議等で職員の意見や提案を聴く機会を設けている。内容によっては上司に報告し、さらに会議を重ねて運営に反映している。	毎月の会議だけでなく、日常的に職員は管理者に意見や提案を述べる機会を持つ。個別面談時には職員それぞれの仕事に対する意見や個人目標の他、個人的な話もできる環境がある。日頃より管理者・施設長から職員に対し声を掛ける姿もある。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	年2回、職員は自己評価を行う。上司は職員の努力、実績、勤務態度、接遇等を総合的に評価している。職員ファーストを考え、働きやすい職場環境づくりに取り組んでいる。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	コロナ禍ではあるが、法人外の研修も再開され始め、本人の希望、または上司の指名で研修の機会を設けている。部内勉強会では職員が講師を努めて勉強会を実施し、自己研鑽、スキルアップの機会となっている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	引き続き、新型コロナウイルスの感染拡大の予防から同業者との交流は少ないが、入居に伴う申し込みや調査の際に情報交換を行い、同業者同士の苦労を分かち合うことで関係性づくりにつながっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前の段階で得ていた情報をもとに、入居後、本人から困り事、心配事、不安なことなど尋ねている。遠慮して言われなくてもあるので、答えやすい雰囲気づくりに努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居申し込みの資料をもとに、契約時に家族が抱えている課題、不安、心配事などを伺い、解決に向けた話を行い、しっかり耳を傾けることで信頼関係づくりに繋げている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居前のケアマネジャーから本人、家族の課題やどのような支援を求めているのかなどをしっかりと引き継ぎ、さらに入居後に自事業所でできる支援を検討している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	今までの生活歴を把握、理解し、生活の継続性を重要と捉え、できること、できないことを見極め、能力を発揮できる場面の提供に努めている。職員はサポーターではなく、パートナーとしての関係性を目指している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	契約時にも「一緒に支えていきましょう」と声を掛けている。ケアプランにも支援の担当者欄に職員だけではなく、「ご家族」と記載し、共に支えていくという関係性を目指している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ禍で外出の制限はあるが、ご家族の理解を得て、お盆や法事に帰られたり、馴染みのパーマ屋さんに顔を見せに行かれたりされた。「顔は見せんと心配さす」と言われ、地域との関係性の継続に努めている。	従来より家族の協力もよく見られ、隣接する事業所利用者である知人との会話、馴染みの美容院利用等、入居者それぞれの生活歴を大切にしたい関わりの継続を支援している。コロナ禍であり、都度状況判断をしながらも関係が途切れない支援に取り組んでいる。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	仲の良い入居者同士は自然と隣り合わせに座わられて関係性ができている。入居者が孤立したり、トラブルにならないように声を掛けたり、他の入居者の輪の中にお誘いしたりしている。		

グループホーム たいめい苑

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	同法人の特養に移行される予定の入居者がいる為、特養の相談員と情報共有している。特養に移行されても家族とは今の関係性を継続できるように努めていく。今でも退居された方の家族から年賀状をいただいている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	普段の会話の中で思いや要望を聞き出すように努めている。コロナ禍だが、実現可能なことは感染対策委員会と協議し実行している。また、主体は本人にある事を忘れず、ケアプランの作成にも努めている。	日々の職員の寄り添いにより思いや意向の把握を行っている。高齢化もあり思いを表すことが難しい入居者もおられるが、「できることは続ける」「できることを引き出す」支援が基本となっており、選択の場面を作りながら意向の把握を行っている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	認知症ケアを行う上で、生活歴、馴染みの関係、生活環境などの生活の継続性を重要と考え、家族からもアセスメントを行っている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	入居前には家族、ケアマネジャー、施設からアセスメントを行っている。入居後は日々の生活中で一日の過ごし方、健康状態、自己資源の把握に努め、能力を活かせるようなケアプランの作成を行っている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	3か月ごとのモニタリングで課題を見直し、半年ごとのケアプランの更新に反映している。状態の変化があれば随時、カンファレンスを行い、家族や他職種の意見、アイデアを取り入れて課題解決に努めている。	介護計画の作成・見直しは、ケアマネジャーを中心に担当職員・管理栄養士・看護師等、専門分野から意見を出し合っている。事前に薬剤師の意見も得る。見直しは年2回行い、家族への説明はできるだけ来所頂き直接説明を行っている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	入居者のケアに関する気づきや共有すべき情報は日常の記録、日程表、申し送りノートに記載している。その情報をモニタリングやカンファレンスに活かし、ケアプランの作成に反映させている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	画一化したケアプランにならない様に本人の要望、家族の状態等も含め、柔軟に対応し、今、必要とされるケアになるよう努めている。コロナ禍で制限がある中でも実現可能なニーズには対応している。		

グループホーム たいめい苑

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナ禍により地域活動が制限され、出向いての参加の機会が少ない状況だが、制限付きで家族や友人等と面会、外出を行うことで、日々の生活を楽しくいただいている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医は入居契約時に家族に確認している。そのかかりつけ医と連携し、必要な医療を受けられるように情報を共有し、関係性を築きながら入居者の支援に努めている。	入居以前からのかかりつけ医の継続した受診を支援しており、現状協力医の利用も多い。協力医からは月2回の往診も受けられる。専門医等通院の場合には、状況によっては家族の同行も依頼する。看護師資格を持つ職員も在籍し、法人内事業所で協力し、適切な医療を受けられるよう支援している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	入居者に体調の変化があった場合は自事業所の看護師、または同法人の看護師に報告し、応急処置や病院受診の必要性を協議し、迅速に対応している。横の連携が取れる体制ができています。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院の場合は当日、または翌日に看護サマリーを病院に提出し情報提供を行っている。現在、コロナ禍で入院中の面会はできない為、電話で情報収集を行っている。退院時のカンファレンスにも参加できない為、事前に情報をもらい、スムーズな退院に備えている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	看取りを希望された場合は自事業所で行うこと、できないことを身元引受人に説明し、家族と情報を共有して共に支援に努めている。	入居者・家族の希望があれば看取りまで受け入れている。実際にその時を迎える時には関係機関協と協力し、家族の意向を都度確認しながら支援を行っている。コロナ禍であり面会制限が必要な時期もあったが、看取り期には事前連絡により家族の面会も全て受入れ、最期の時間を共に過ごして頂いた。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	毎年、9月に部内勉強会を計画し、心肺蘇生の理解を深めている。また、緊急事態の際には情報共有、情報伝達がスムーズに行くように緊急連絡網を整備し、活用している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年に2回、昼間、夜間想定で避難、通報、消火訓練を実施している。また停電に備えて発電機、蓄電池の取り扱いの訓練も実施している。コロナウイルスの感染が収束した際は、民生委員の方々にも参加を依頼する。	従来、避難訓練は地域役員の方にも参加を依頼し、事業所の取組みを見て頂いている。防災対策委員会の取組みもある。自然災害に向け、台風対策として年1回発電機のガソリン入替え、梅雨時期には排水溝等の確認等を行っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	毎月の部会の前に理念の唱和を行い、人格の尊重、尊厳の理解を深めている。たいめい苑は接遇に重きを置いており、言葉遣いや敬う気持ちを常に念頭に置いて入居者と接している。	入居者一人ひとり「かけがえのない存在」としたケアを行っており、人格の尊重とプライバシーについては年間計画に基づいて研修を重ねている。職員同士の私語にも配慮し、気になる点が見られた際には管理者より都度声掛けしている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	何を希望されて、どのような思いをお持ちかを日頃の会話の中から探っている。入居者が自己決定しやすいような声掛けに努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	職員本位とならず、主体は誰なのかを忘れずにケアに努めている。無理強いをせず、本人の思いを大切にして、その人らしい生活となるように支援している。会話の中で希望などを引き出すように努めている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	月に1回、出張の理髪があるので、ご希望があれば、散髪を行っている。職員が髪染めを行うこともある。馴染みのパーマ屋を利用される入居者には送迎を行っている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	汁物は自事業所で調理しているため、調理の様子やにおいは伝えることができる。一緒に下ごしらえができない分、食器拭きやお盆拭きを行っており、自身の役割となっております。	食事は隣接する事業所で作っているが、汁物等一部は毎日事業所での手作りも取り入れている。同じ法人内であるため入居者の状況を伝えることができ、介護計画見直しの際には管理栄養士の意見も取り入れている。お茶の時間には日本茶・コーヒー等、入居者のその時の気分で選択できる。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	毎日、食事摂取量、水分摂取量をチェックしている。水分はお茶、牛乳、ジュースなどお好みの物を提供している。食事摂取量の減少がある方は好きなパンやお菓子などをお出ししている。ソフト食、ミキサー食を提供している入居者もいる。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、義歯洗浄、歯磨き、うがい等の本人にできる口腔ケアを行っている。自分で行う場合は自分で行っていただき、必要に応じて介助を行っている。		

グループホーム たいめい苑

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表をもとに排泄パターンの把握に努め、出来る限り、トイレやPTイレでの排泄を行っている。また、排泄パターン、尿量によって尿取りパッドのサイズ、パッド確認の間隔を変えている。	出来る限りトイレでの排泄に向けた支援を継続している。中には、お気に入りの写真をトイレ近くに貼り、居室からトイレまでの歩行が楽しみなるような工夫も見られる。自発的な排泄の促しのため、体操やヨーグルトの提供も行っている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排泄を促す為、好みの水分補給、主治医からの緩下剤の処方、毎朝のラジオ体操なども行い、規則正しい排泄に努めている。便秘気味の方には、朝食の汁物に小スプーン1杯のオリーブオイルをかけている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	原則、週2回の入浴を基本とし、曜日を決めて行っている。順番は決めておらず、柔軟に対応している。日曜日はフリーとし、必要に応じた入浴を行っている。	基本的に週2回以上の入浴としている。入居者の意向や体調も見ながら、臨機応変な対応を行っている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	室温、照明は本人に併せて調整し、安眠できるように心がけている。寝具については今までの生活習慣や身体の状態に合わせて、布団とベッドで対応している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	内服薬の変更やそれに伴う副作用など注意が必要な場合は日常の記録に記載し、情報の共有をしている。また、薬剤師に適宜、相談をしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	食後の食器拭き、お盆拭きを役割や楽しみにされている方が増えている。外のイスで落ち着いた時間を過ごされる方もおられる。それぞれの能力を活かせる活動を日々、探している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍の制限で今までのような活動はできていないが、希望により海やドライブに行ったりとできる支援を行っている。入居者の行きつけの美容室からは、「お迎えに行きましょうか」とご協力の言葉をいただいた。	以前のように買い物等人が集まる場所への気軽な外出は難しい状況である中、思い出の場所や馴染みの場所へのドライブ、ちょっとした買い物等、数人ずつ出かけている。コロナ禍終息の際には買い物へ行きたいと検討を初めているところである。事業所の脇には自家菜園もあり、敷地内で手入れの行き届いた花を眺めながらの散歩等、外気を感じる機会作りは継続している。	

グループホーム たいめい苑

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	ご自分で金銭管理をされている方は、美容室代や面会時にひ孫様にお小遣いを渡されている。コロナ禍で買い物に行けず、お金を使う機会が無いが、訪問販売のパン屋で買い物をされている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話はいつでも家族に掛けられる環境は整っており、県外の家族に対してはZoom!による面会も行っている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共用の空間には書道や花を飾ったり、外の草が伸び過ぎて不穏にならないように草刈りをしている。入居者同士の関係性を配慮した距離感や席の配置を行っている。席によっては寒暖差がある為、室温調整にも気を配っている。	共用空間には食卓だけでなく、たたみスペースやソファ等もある。入居者は食器拭きや洗濯物干し・畳み、時には習字を楽しんだり、日々の生活が送られている。玄関前には柿の木や花々が整備されており、事業所に居ながら季節を感じることができる。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	すでに関係性ができている入居者同士の席の配置はできている。その中でも一人で座る為の一人掛けのソファや、一人で座れる空間を確保している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	認知症の方にとって生活の継続性を重要と考えているので、使い慣れた物、馴染みの物、思い出の品等を持って来てもらい、グループホームを我が家の様に、安心できる場所となるように心がけている。	入居者のこれまでの生活歴から馴染みのある用品が持ち込まれ、筆筒・テーブル等もみられる。寝具も希望により布団・ベッドとも利用できる。入居者それぞれの身体状況や動きを把握し、動線確保等安全に配慮し、「それぞれの生活空間」となるようにしている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	入居して慣れるまでは居室が分かるように表札や、居室までの矢印、トイレの表示を設置している。居室内は掴まれば移動できる方には動線にソファなどを配置して安全に過ごしていただけるようにしている。		

2 目 標 達 成 計 画

グループホームたいめい苑

作成日 令和 4年12月29日

【目標達成計画】

優先順位	項目番号	現状における問題点、課題	目 標	目標達成に向けた具体的な取り組み内容	目標達成に要する期間
1	49	コロナ禍とはいえ、日常的な外出ができにくい状況となっている。	入居者が望まれる、ちょっとした外出の実施	海、花、思い出のある場所など月間計画で取り組む。	1 2 ヶ月
2	40	外出に制限があり、施設以外の食事を楽しむ機会が少ない。	普段と違う食事を楽しめる取り組みの実施	コロナの感染拡大で延期となったデリバリーランチを再開する。定期開催したい。	1 2 ヶ月
3	48	屋外での楽しみが少なかった。	裏庭の活用を入居者と一緒に行う	裏庭を活用した野菜作りや花の手入れなどを行い、新たな役割、楽しみを見つける。	1 2 ヶ月
4					
5					

注1) 項目番号欄には、自己評価項目の番号を記入すること。

注2) 項目数が足りない場合は、行を追加すること。